愛鳥活動による愛鳥意識の高揚をめざして

栃木県林務観光部指定　市街地における愛鳥モデル校
足利市立千歳小学校

Ⅰ はじめに

本研究は，愛鳥モデル校としての中間まとめという考えから，昭和５７年度栃木県教育委員会主催野生鳥獣保護実績発表会において，報告したものをまとめたものである。

本校では，

- ○　本気で学習する子
- ○　明るく心豊かな子
- ○　健康でたくましい子

を教育目標にかかげ，人間性豊かな児童の育成をめざしている。

そこで，本校では教育目標達成のひとつとして，野鳥をはじめ，昆虫や植物を愛し育てることを通して，思いやりのある明るく生き生きとした子どもになれるよう，学校をあげて愛鳥活動を実施している。

さらに，野鳥に関しては無関心の児童が多いという実態から，本校では　ひとり　ひとりの体験を通して，愛鳥意識の高揚をめざすという方向から上記テーマを設定した。

Ⅱ　研究のねらいと構想

1.　ねらい

本校教育目標の達成という立場，および「愛鳥活動による愛鳥意識の高揚」というテーマから，つぎの３つの柱をたてた。

(1)　一体化をめざす研究の組織づくり

(2)　愛鳥活動年間計画と愛鳥週時程表づくり

(3)　愛鳥活動の実践

ア．愛鳥のための環境づくりと鳥の世話

イ．継続観察記録

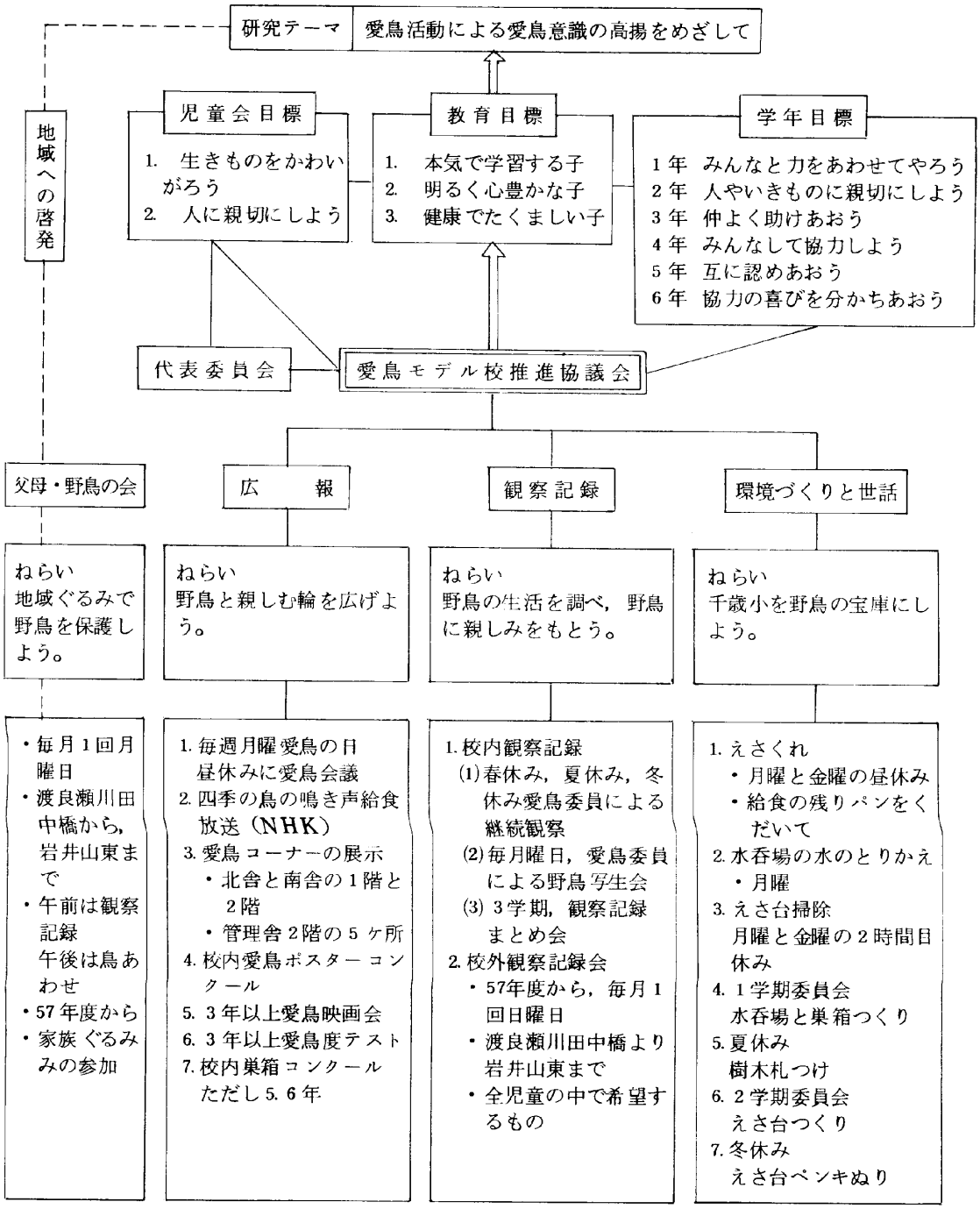
ウ．広報活動と各種愛鳥コンクールへの参加

エ．父母や地域の啓発

2.　構　想

前記のねらいをうけて「図１　愛鳥活動の指導構想図」をたてた。本校では，組織の位置づけとして，児童会とは別個に，児童会に関連づけて「愛鳥モデル校推進協議会」をつくり，推進の中核とした。

図1　愛鳥活動の指導構想図



※愛鳥モデル校推進協議会メンバー｛児童より　企画6　放送2　広報2　委員会23　部活9　計42人
職員より　委員会3　部活2　重複して計3人｝

Ⅲ 研究の実際

1. 研究経過（鳥獣保護に関する実践）

年　度	鳥獣保護に関する実績の内容	鳥獣保護のために果たした効果
昭和５４年度	・愛鳥モデル校の指定を受ける。 ・５・６年クラブとして発足	・食餌台５台設置　・植林
昭和５５年度	・クラブが５・６年児童会委員会となる ・朝日小学生新聞第３回愛鳥作品コンクールに応募 ・足利市立小中学校理科研究展に応募	・樹木名札付　・愛鳥コーナ１ケ所設置 ・給食残パンえさくれ ・金賞奨励賞受賞 （１年間の千歳小における鳥の観察）
昭和５６年度	・委員会が愛鳥モデル校推進協議会となる。 ・栃木県巣箱コンクールに応募 ・足利市立小中学校理科研究展に応募	・企画，放送，広報，委員会の合同 ・３年以上愛鳥度テストの実施 ・巣箱，えさ台，水呑場の増設 ・佳作受賞 ・銀賞奨励賞受賞 （２年間の千歳小における鳥の観察） ・鳥が年々多くくるようになり，学校あげての愛鳥意識高まる。
昭和５７年度	・愛鳥モデル校推進協議会に部活も加わる。 ・ＮＨＫ四季の鳥の鳴き声校内給食放送 ・栃木県教育委員会主催昭和５７年度野生鳥獣保護実績発表大会に参加 ・親子渡良瀬川・岩井山の鳥の観察記録会 ・校内愛鳥ポスターコンクール ・栃木県巣箱コンクールと愛鳥ポスターコンクールに応募 ・校内３年以上愛鳥映画会とおはなし会 ・第２回３年以上愛鳥度テストの実施 ・第６回日本標準教育賞に応募	・巣箱１０こ増設　・水呑場の増設 ・えさ台１０こ増設　・月曜を愛鳥の日 ・関心をもって聞く態度がよくなる。 ・栃木県第２位受賞 ・毎月１回日曜，父兄の参加がふえつつある。 ・いずれも佳作受賞 ・よい子の県民の森 ・愛鳥意識の高揚がややみられた。 ・佳作受賞

2. 野鳥保護のための環境づくり

「図２　野鳥保護のための環境づくり」は，千歳小の配置図です。いちばん鳥が飛んでくるところは，よい子の森，つぎに北の森で，よい子の森には１０米から２５米の高さの樹木が約１６０本密集し，えさ台や水呑場も集中させた。

また，「鳥さん　こい　こい」を全校の合言葉に，鳥が飛んできたときには，鳥に石を投げたり追ったりしないようにしている。

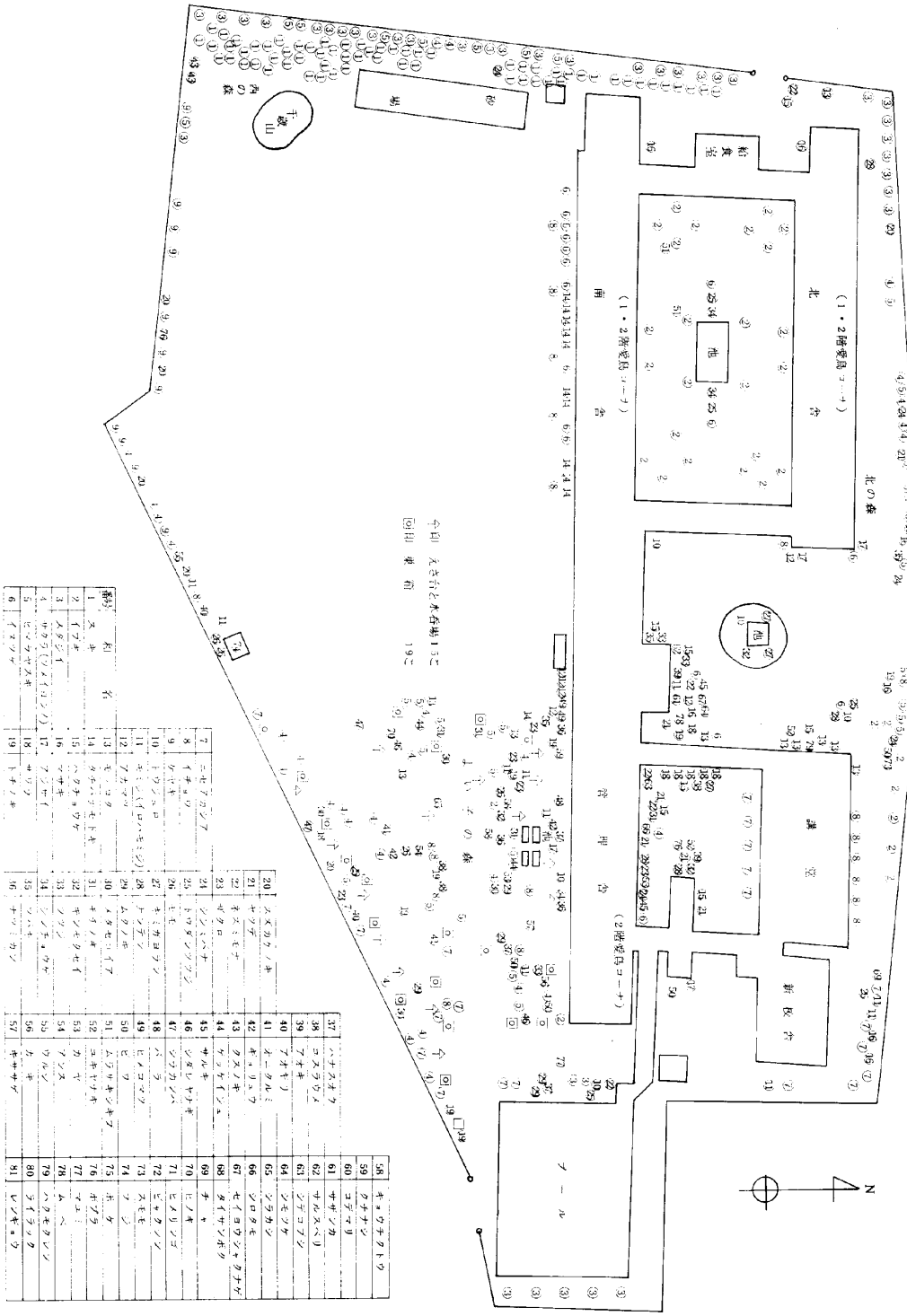
野鳥がたくさん千歳小学校へ飛んでくるよう次のことをしている。

ア．餌になる木の植林　　（現在　５６１本）

イ．えさ台と水呑場の増設　（現在　１５か所）

ウ．巣箱の増設　　（現在　１９こ　）

図2　野鳥保護のための環境づくり



3　鳥の継続観察記録

(1)　鳥の観察記録のねらい（内容）の経過について

本校では鳥の知識については誰しもほど遠いもので，指導者にも恵まれず研究推進の手がかりがつかめにくかった。

そこで，理科研究の観察記録として位置づけた。

さらに，昭和５７年９月からは，愛鳥の成果を上げるためには，学校と地域とが一体となり，相互に補完しあってこそ期待できる観点にたって，地域ぐるみの観察記録会をはじめた。

年　度	校内観察記録のねらい（内容）
昭和５５年度	・夏休み・冬休みを利用して，毎日１時間おきに気温・飛んでくる鳥の数・飛び方・集団性などを継続観察し，それらの関連性をまとめる。
昭和５６年度	・前年度と同じことを調べ比較検討して，問題点をつかむ。
昭和５７年度	・全児童対象に観察写生会を開き，愛鳥に関心をもたせ，その問題点をつかむ。 ・愛鳥係の児童については，週１回の観察記録の集積と，夏休み・冬休み・春休みの毎日，観察記録をとらせ，今までの観察のあり方の再検討をする。 ・父母への啓発から，親子鳥の観察記録会を開く。

(2)　鳥の観察記録

誰しもがききたがると思われるものを次のとうり選び，そのほかの観察記録は紙面の都合で省略する。

ア．千歳小学校に飛んできた１年間の鳥の数（夏休みと冬休み）
イ．どんな鳥が，どんな木の実を食べにくるか。
ウ．いちばん鳥の飛んできた日の時間帯（夏休み・冬休み・春休み）

ア．千歳小学校に飛んできた１年間の鳥の数（夏休みと冬休み）

図3　千歳小学校に飛んできた1年間の鳥の数
（夏休みと冬休みで日曜を除く）

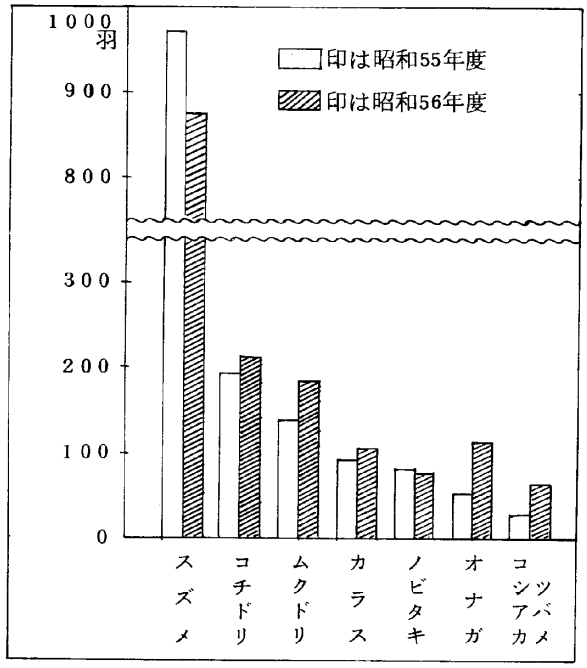


図3のグラフは，千歳小学校に飛んできた1年間の鳥の数のグラフである。（夏休みと冬休みで日曜を除く。）

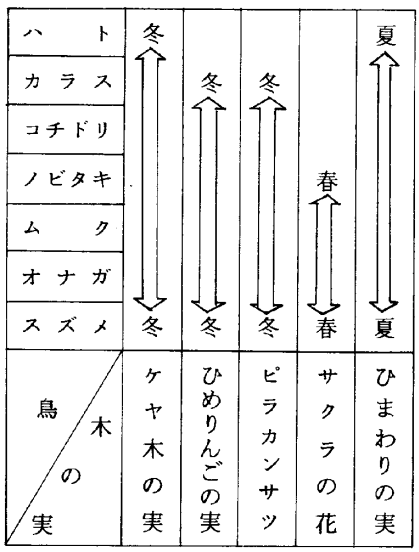
方法は，9時から4時まで1時間おきに数えて合計したものである。

昭和55年度は1559羽，昭和56年度は1654羽飛んできて，ややふえた。

とくにオナガがふえてスズメが減った。

昭和54年度前は調べなかった。

図4　どんな鳥が千歳小学校の
どの木の実を食べにくるか。



イ．どんな鳥が千歳小学校のどの木の実を食べにくるか。

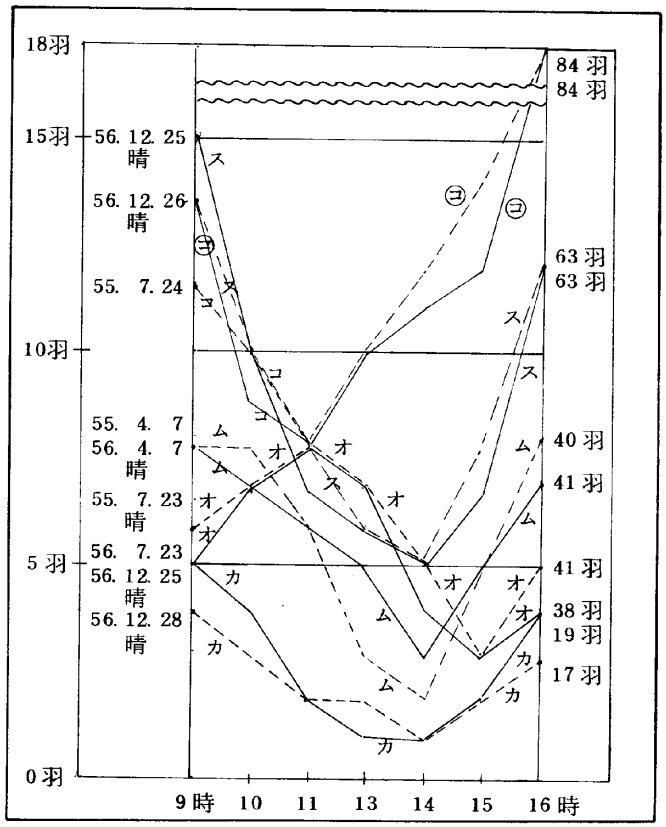
図4は，昭和56年度に調べたものである。

グラフの見方は，ケヤ木の実を食べにくる鳥はハト・カラス……が冬にくる。ひまわりの実を食べにくるのは，ハト・スズメが，夏食べにくる。

いちばん鳥のくる木は，ケヤ木・ヒメリンゴ……の順，

1年中，どんな木の実でも食べにくるのは，スズメ・オナガ・ムク・ノビタキの順である。

図５　いちばん鳥の飛んできた日の時間帯
（夏休み・冬休み・春休みで日曜除く）
——— 印は昭和55年　－－－－ 印は昭和56年



※ コ印はコシアカツバメ・ス印はスズメ・ム印はムクドリ・オ印はオナガ・カ印はカラス

ウ．いちばん鳥の飛んできた日の時間帯は，図５から，わかったことは，

○ いちばん鳥が飛んできた時間は，オナガを除き朝と夕方

○ いちばん鳥が飛んできた季節は，グラフの月日らんから，オナガを除き冬

いずれも晴れの日である。

○ 昭和５５年度と昭和５６年度の鳥の飛んでくるのを比較すると，差はない。

また，当日の飛んできた鳥の数も差はない。

Ⅳ 評　価

1. 評価の基本的な考え

本校の研究テーマである「愛鳥活動による愛鳥意識の高揚をめざして」を受けて，次の問題を作成し，昭和５６年度と昭和５７年度に同じ問題を３年生以上が実施して比較検討をした。

2. テスト問題　　（　）は出題意図　　○印は正解

問１　鳥にあったら　どうしますか　（関心をもつ）

A　石を投げる　Ⓑ　観察記録をとる　C　つかまえる

問２　鳥の巣を見つけたら　（外敵から守る）

A　屋根をつくる　Ⓑ　そっとする　Cとって帰る

問３　鳥のヒナを見つけたら　（子を育てる親）

Ⓐ　そのまま　B　飼う　C　育てて放す

問４　羽根が落ちていたら　（土になる）

A　帽子に飾る　B　羽根ホウキにする　Ⓒ　ひろわない

問５　ヘビが鳥の卵を飲もうとしていたら　（喰われる自然）

A　追いはらう　　B　写真をとる　　Ⓒ　そのまま

問６　鳥の観察に持っていくもの　（目的にあった準備）

Ⓐ　双眼鏡と図鑑　　B　楽器やラジオ　　C　スポーツ用具

問７　鳥にラシをかけられたら　（愛　鳥）

A　石を投げる　　B大人にもんくをいう　Ⓒ　がまんをする

問８　朝，鳥の声で目がさめたら　（関　心）

A　追いはらう　　Ⓑ　じっくり聞く　　C　耳せんをする

問９　千歳小へ飛んでくる鳥にエサをやる期間は　（夏は餌が豊富）

A　一年中　　B　夏だけ　　Ⓒ　冬だけ

問10　キュウカン鳥を飼っていたら　（熱帯鳥は飼育する）

Ⓐ　そのまま飼う　　B　放す　　C　芸をしこむ

問11　メジロかウグイスを飼っていたら　（許可制）

A　そのまま飼う　　Ⓑ　放す　　C　鳴き声コンクールにだす

問12　カスミ網をみつけたら　（禁　止）

A　破りすてる　　Ⓑ　警察にとどける　　C　えものをわけてもらう

問13　野外であなたの出したゴミは　（ゴミは自然を破る）

Ⓐ　持ち帰る　　B　ゴミ箱をさがす　　C　そのまますてる

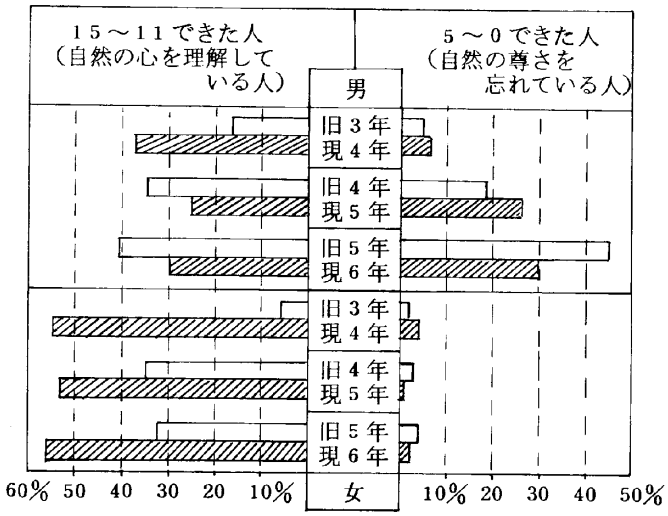
問14　鳥とつきあう方法は　（自然の中で）

Ⓐ　観察記録をとる　　B　飼う　　C　標本にする

問15　鳥を守るためにどうするか

A　鳥と親しむ　　Ⓑ　自然を守る　　C　一年中えさをやる

図６　愛鳥度テスト成績　□印は56年　▨印は57年



3.　愛鳥度テスト成績の結果について，図６より

(1)　去年の３年（旧３年）が，今年の４年（現４年）というふうに比べ，左側がよくできたパーセント，右側ができのよくなかったパーセントである。

(2)　男女を比べると，女子は男子よりできる。

(3)　去年と今年を比べると，女子はよくなっている。男子は同じぐらいである。

(4)　学年別にみると，男子は高学年になるほどできがわるい。

4. 愛鳥度テストの誤答のおおかった問題を3問選びだしたのが，図7の表である。

(1) いちばんできのわるいのは，ゴミをすてる。

ゴミすてのよくないことはわかりきっているが，現実には人が見ていなければすてている。なぜだろうか。自然愛護の活動による意識の高揚がたりなかったからだと思われた。

(2) キュウカン鳥とヘビの問題であるが，通常人なら当然そのように答えるであろう。愛鳥活動をとおしての愛鳥学習のあまさを感じた。

図7　愛鳥度テストの誤答のおおかった問題について

No.	男子 56年度	男子 57年度	女子 56年度	女子 57年度	平均
1	野外でゴミをすてる。 35％（ゴミは自然を破る）	野外でゴミをすてる。 44％（ゴミは自然を破る）	キュウカン鳥を飼っていたら芸をしこむ。 39％（そのまま飼う）	野外でゴミをすてる。 57％（ゴミは自然を破る）	野外でゴミをすてる。 43.5％
2	ヘビが鳥の卵を飲もうとしたら，追いはらう。 34％（喰われる自然）	キュウカン鳥を飼っていたら芸をしこむ。 33％（そのまま飼う）	野外でゴミをすてる。 38％（ゴミは自然を破る）	キュウカン鳥を飼っていたら芸をしこむ。 40％（そのまま飼う）	キュウカン鳥を飼っていたら芸をしこむ。 35.0％
3	キュウカン鳥を飼っていたら芸をしこむ。 28％（そのまま飼う）	ヘビが鳥の卵を飲もうとしたら追いはらう 31％（喰われる自然）	一年中鳥にえさをやる。 32％（冬がよい）	一年中鳥にえさをやる。 31％（冬がよい）	ヘビが鳥の卵を飲もうとしたら追いはらう。 31.5％

※　（　）内は出題意図

V　研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

(1) 本校では市街地のためか鳥にはあまり関心もなく，鳥の知識のある人がすくなかったが，学校あげての愛鳥活動により，愛鳥意識が高まりつつあり，鳥も次第におおく飛んでくるようになった。

(2) 研究の推進にあたっては，特異的な鳥ということからよき指導者に恵まれず，何を研究内容としてよいかまよいながら，切り開いて研究の軌道にのりつつある。

(3) 年々，愛鳥活動の拡大化により，校内においては各種愛鳥行事をもつことができ，校外においては地域ぐるみの愛鳥活動や各種愛鳥行事に，学校あげて参加することができた。

2. 今後の課題

(1) 愛鳥度テストの結果から

「人が見てなければゴミをすてる。」本校のいちばん短所である。今後学校あげて具体策を考えていきたい。

さらに，キュウカン鳥を飼っていたら芸をしこむ問題やヘビが鳥の卵を飲もうとしたら追いは

らう問題については，今後愛鳥学習の進め方を検討していきたい。

(2) 地域ぐるみの愛鳥活動について

地域と学校の一体制による愛鳥効果の期待という考えからはじめて6か月，参加者がふえつつあり今後の推進について検討していきたい。

(3) 過去3年間の研究内容の再検討の時期にきており，新しい方向づけを見いだしたい。

（文責　愛鳥モデル校研究主任　茂木　信一　教諭）

評

学校教育目標具現の一環として，愛鳥活動の指導構想をたて，思いやりのある明るく生き生きとした子供の育成を目指して，昭和54年度から着実な積みあげをしてきていることに対し，敬意を表します。

特に，千歳小としての愛鳥活動のねらいを明確におさえ，そのねらいを達成するために，創意ある工夫された活動が展開され，さらに，家族ぐるみの野鳥観察会の実施など，学校をとりまく地域ぐるみの愛鳥活動まで広げている点は，すばらしいことだと思います。

また，千歳小の「よい子の森」や「北の森」に飛来する野鳥の種類や生態を継続的に観察していることは，子供たちが自然に直接触れ，野鳥を通しての自然の巧みな仕組みや不思議さに驚き，その秘密を発見したとき，子供たちの心に深い感動が湧きあがり，自然を愛する豊かな心情が育っていくものと考えます。

今後，千歳小の愛鳥活動の実践が，さらに深まりと広がりをもって発展することを期待しております。